

「ザ・ガチンコ・ジャーニー

(ガチンコの旅)」

ルワンダ・スタディツアー報告

2012(8月16〜24日)

(●「ガチンコ」の意味、二つある①外務大臣との面会を終え外に出たとき参加者の一人N嶋君が「大津さんこのツアー、まじガチンコですね」と話しかけてきた、「なんだかんだで最後は会っちゃうんですね」、それはその場で問題に対応し、何とか目的達成するといった意味、「事前準備」がすべてではないということ、アフリカ(取材)では特にこの対応力が求められる②難民キャンプの子供たちは若い学生たちに対して、お涙頂戴とか、感動を持って帰ってくださーいといった「刷り込み、思い込み」を完全にぶっ壊した、中指を立て「フアック」を言いながら、難民として以上に当たり前の人間／若者として挑んできた、問題と存在を突き付けてきた、お前らはどうすんだオレタチのことを、お前ら何しに来たんだと、この①と②が「予定調和」でない「ガチンコ・ジャーニー」の意味だ)

●アフリカ・スタディツアーは今回で7回目になる、中でもルワンダは4回と最も多い、ルワンダを選んでしまうのは虐殺、難民、復興、成長・・・さまざまな重要なテーマ、現在の問題を抱えているからだと思う

15人前後の若い学生他をアフリカに連れていくのは簡単ではない、中でも引率の責任者でもある拓大甲斐教授(国際学部、国際政治)の御苦勞は計り知れない、行く前

は不安との戦いとなる、ましてや、昨年事情により実施してないこともあり、不安はいつもよりも大きかった、ツアーの内容以上にセキュリティ(安全面)への配慮、注意が最大の関心事だ、それを超えるプライオリティは存在しない、幸い、ルワンダ現政権の治安強化の姿勢もあり、治安面はほぼ確保されている、町中に立つ多くの兵士の姿を見ればことは明らかだ(このことについてのは非を問う必要はない、ルワンダの国内問題だからだ)

ツアーのルートと内容(テーマ)はだいた以下の通りだ

●キガリ↓タラマ、ニヤマタ教会(虐殺現場)↓虐殺記念館↓ブタレ↓ムランビ虐殺サイト(↓キゲメ難民キャンプ)↓キブエ↓キジバ難民キャンプ↓キガリ市内ツアー↓シヨツピング↓ウムチヨミザ・スクール↓旧ハビヤリマナ邸↓日本大使館↓JICA・プロジェクト(盲人リハビリ)↓外務大臣面会(当初、カガメルワンダ大統領を予定していましたが、多忙等によりルイズ・ムシキワボ外務大臣が来てくださいました)●●

●目的&テーマ/全体としてのテーマはルワンダの過去・現在・未来である、ただ個人的には平和構築、開発協力といった日本で学んでいる既存の知識、刷り込まれた情報以上に①「感性」と②「想像力」によって刷り込みにはない現実を体感する旅であり、さらに③「他者への関心(がどこまで可能か)」と④「問題解決力(アフリカ人たちがどのように問題と取り組んでいるか)」をリアルなアフリカから学ぶことだと考えていた

中間日にキガリのホテルで行った「振り返

り”で、それぞれ（ボクを除く15人）からでたコメントはそれなりに①④のすべてをカバーしていてカメラを回しながらみんなの感性と想像力は考えていた以上に凄いなと感じた（最後に出てきます）

●このツアーは単なるボランティア体験とも違う、例えば難民たちの向こうにある背景、現実について考えることにより重きを置いたツアーでありたいと考えている、甲斐先生の言葉を借りれば”国際政治の最前線”の一端を体感する旅ということだ、どのような苦しみであろうとまた問題、悲劇であろうとその向こうに”政治（問題の根源）”を見ない限り、それは一個の”同情”に終わるのではないか、それは訪ねられた人間たちにとって不必要な迷惑以外の何物でもない

またこのツアーはスタディ・ツアーと名乗っているが、類まれな体験を通して自分の未来への”自己投資”の旅であるとも考えている、日本とアフリカは遠い、貿易投資も他の先進国他に比すると極端に少ない、そんな内向きな日本から自らの意志で金を払ってアフリカへ行くこと自体大きな挑戦であり、リスクを負うことである、だがその体験と体感は何物にも代えがたい貴重性をもたらす、それがいつか将来この日本社会でどう生かされるかは個々の気持ちと能力次第だ、現今の中韓のアフリカにおける圧倒的存在感、パワーを考えると、すでにかなり手遅れ感もある、だが戦いはこれからだ、少なくともこの小さなツアーに参加した若い人たちにはいつかその戦いの戦列に加わってもらいたい

このツアーはガチンコ・ライブの旅である
「なんすかそれ」という言葉が聞こえて

きそうだが、ガチンコは言葉を変えていえば突破力、あるいは対応力といってもいい、日程もきちんと決めているようでそれほどでもない、視察旅行ではないからだ、現実には難しいかもしれないが、何処にでも行きたい旅なのだ、無謀とは知りつつも大統領との面会も事前にリクエストしていた、一昨年（2010）は中国大使館にも行った（よく受け入れてくれたと思う、さすがに今年は尖閣問題の渦中でもあり実現しなかった）、大統領との面会はかなわなかったが、急ぎよ外務大臣とはお会いできた、しかも大臣（コンゴ問題等で超多忙／女性）は若い学生たちに向かってコンゴ問題も含め1時間熱く熱く語ってくれた（内容については機会を見つければ日伝えたい）

二日目の朝、ムランビ（94年、5万人以上が殺された、タラマ、ニヤマタ教会などが頭蓋骨など、骨化したものを安置しているのに対し、ムランビはミイラ化した遺体を安置してある、腐食の進行を防ぐため大量の石灰やレモン水を使用したと聞いている、維持管理が大変なため近いうちに800体余の内の数十体のみを展示室の中に作られた外気にさらされない場所に安置するという）に向かうバスの中でガイドのサム（テレビ取材など含め旧知の仲）がそっと耳打ちしてくれた、「ムランビの後、2週間前にできたばかりの難民キャンプへ行ってみる」

、予定外だったし、今コンゴで起きてる戦いの一端が見える、めったにないチャンスだ、許可の関係でキャンプの中には入れないかもしれないがちょっとした取材の気分だ

先生に伝えるとはじめ「無理はやめましょ

う」という答えが返ってきた、「ムランビから20分くらいの所です」と言ったら、即「行きましょう！」という返事が返ってきた、先生も気合が入っている

やや日が傾きかけた曲がりくねった山道をしばらく走ると（16年前ボクはこの道を一人でコンゴに向けて走っていた、深い森をふた山ほど超えるとそこはコンゴだ）、急に道の両側を歩く人間の数が増えてきた、サムが「refugees 難民」と言った、しかもつい最近コンゴの戦乱から逃げ延びてきた人間たちだ、急にあたりの雰囲気が変わった、ボク的に言わせてもらおうと、ややきな臭いにおいがしたのだ、まさに紛争地、あるいはそれに準ずる場が発する臭い、緊張感がそこには満ちていた、しびれるな（個人的ですいません）って思ってたその時、車内の後方が何かざわついていた、バスの中から写真撮影していたのを見咎められたのだ、ボクも回していたビデオカメラを降ろし、カバンの中に入れた、意外と後ろは長引いている、ただ救いはポリスだったことだ、仮に軍隊だったら車の中に乗り込んできて全員車（中型バス）から降ろされたかもしれない、まじかで見えるダークグリーン迷彩服と、AK47ライフルが発する威圧感は圧倒的だ、相手がミリタリーとなると、ついこないだアルジャジーラを連れてコンゴ取材してきたサムの経験と交渉力でもギリギリだったかもしれない、ただボクにしてもこれくらいは問題ないと感じていた、バスの外でサムが書類を見せながら話していた、結局ゴーサインはもらったが意外としつこかった、「サンキュー」と言ったが若い警備のポリスはにこりともしなかった

さらに少し走ると窓の左手に盛り上がる丘の上に密集した白い家々が整然と並んでいるのが見えた、少し離れているし、沿道の木立ちも多いので見えにくかったが、サムの提案で全員車を降りることにした、「絶対に離れるな、ひと塊で歩いてください！」先生の声が聞こえる、ボクも少しだけ気合を入れて「離れるなよ！」と学生たちに言った、何故かみな先生の真似をしてバッグを前に抱きかかえている、畑の中の細道を登ること5分、大きな谷の向こうに連なる丘の上にキャンプが見えた、夕暮れの中に1万人以上の運命を抱きかかえ、支えるようにKIGEME 難民キャンプの白い家々がびっしりとかたまっていた、ここから西へほぼ100キロ（約1時間半）走るとそこはもう戦乱のコンゴだ

ガチンコと書いたがボクとしてもそのためこれまでの取材体験（情報+ネットワーク+直感力）のすべてをこのスタディツアーにつき込んでいる、ガチンコ力は突破力と言いつい換えてもいい

カガメ・ルワンダ大統領面会の要求、これはある意味で挑戦でもあった、と同時に自分の考え方の確認でもあった、ボクは日本の政府、官僚の人たちとは違って、大統領をはじめアフリカのリーダー、高官たちはどんなところからのリクエストであっても断る理由が無い限り、それなりに言い分が通っている限り必ずあってくれると信じていた、そうした気持ちでこれまで何人かの大統領、さらにゲリラ・グループのリーダーたちと会い、インタビュもしてきた、日本社会と違ってそういった点においてはすごくオープンで、ストレートなのだ、そこに記者クラブの会員証はとか誰の紹介な

のとかがといった「上から目線」。「仲間意識（よそ者排除）」意識は存在しない、それが世界のスタンダードといえる、こうした点において、島国的、村的カルチャーが根深く残る日本は世界から、もちろんアフリカからも負けていると思う、こうした点は外から日本を見ない限り中にもっている限り見えてこない、そしてこういう「世界」を身近に感じてもらいたいのもこのアフリカ・スタツアの目的の一つだ

22日、帰国前日の最後の日、午前中から甲斐先生は動いていた（ボクは学生とプールで泳いでいました、すいません！サムとはその前から少し動いていました）、先生が一端ホテルに戻られた後今度は二人で外務省（経済協力省）へ行き、局長に会うと、かなり前に在京ルワンダ大使館に出しておいたリクエストのレターは届いてないという（当たり前なのでがっかりしたがとくに落胆はしなかった、むしろここからが本番だ）、レターの内容はある意味企業秘密（笑）なので公開はできないが、それなりの自信のある内容だったが、しかし現実には動いていなかった、一度ホテルに戻り学生にはまだ可能性は残っていると伝えた、局長が動いてくれると言ったので再び外務省に行くことにしたが、万が一に備え今度は全員（一応簡易な正装）でバスに乗り外務省に押し掛けた、結局その時間帯では答えが出ず、大統領へのお土産を手渡してまたホテルに帰った、午後一はJICAのプロジェクト（盲人リハビリ）訪問だ、ボク的には非常に印象の深い再訪したい場所の一つだ、その前後、はつきりした時間は覚えてないが、外務省から外務大臣があってくれるとの連絡がサム経由で入った、すごいな！やっぱ

りやったなと思った、ボクら、甲斐先生とのこのアフリカ・スタツアはいつも相当ついでにいると思う、さらに「会ってくれるという」ボクの考え、持論は外務大臣とはいえ今回も証明されたことになった、たとえ相手が一回の学生であろうと即断即決するアフリカ・パワーはすごい、中国も韓国もこの同じ軌道の上で勝負しているのだ、日本のどこかの誰か見たクイチイチ、誰の紹介かとか、「何処の馬の骨」なのかといった上から目線は一切ない、「人間として」はまったく対等という価値観がそこにはある、市民社会を戦いつつてきたというそこには鋭い政治センスがある

これは単なるプライベートなルワンダ・スタツア報告で、こういった見方が、どこまで参加した若い学生の皆さんと共有できるのかさっぱりわからないけど、長いアフリカ体験からいうと、アフリカを見れば見るほど、逆に日本（社会）が見えてくるということだ、学生の誰かが言っていたけど、逆に今の日本が学ばなければならぬこともまたあるということだ

この報告はとくに時間列やルート順に書いているわけではない、アトランダムに自分の中のトピックをまとまりなく書いているだけだ

コンゴ情勢で周囲から危ぶまれていたキジバ難民キャンプの訪問も無事にできた、ただ今回はキャンプの入り口で止められた、キャンプのセキュリティのリーダーが改めて先生にキャンプ訪問の理由について説明を求めていると言ってきたので、サムと一緒に先生が説明、交渉に車を降りて行った、その時の先生の眉が逆8の字に吊り上っていたのをボクは見た、話し合いは意外と長

かった、コンゴの問題等も影響しているのかもしれないと思ったりした、こういうことは取材ではしょっちゅうある、最も大切なのは、相手（問題）への共感、偉ぶらない（対等かややそれ以下に立場を置く）、熱い目的感（これが前2者と合わさる時必ず相手に通じる／突破できる、もちろん何回かに1回はできないときもある）等々である。

2回目の訪問であったがやはり1回目とはまた印象も違っていた、今回何かインパクトが強かった、その原因はキャンプの子供たちにあった、時に“くそガキども”（すいません！）と呼びたくなるくらい、元気でパワーがあった、学生たちは圧倒されていた、ビデオやテレビで見る難民の子供たちの姿はそこにはなかった（少なくとも表面的には）、在ったのは、20歳前後の学生を何とも思わない“タメ”な子供たち（10〜15、6歳）だった、中には子供たちの中指を立てられ軽いショックを受けていた学生もいた、それは逆に同情だけ（難民問題解決への政治的ビジョン、アプローチを欠いた食料配給等／貧困やスラムの問題も背後には政治的問題がある）ではどうにもできない現実を突き付けていた、同情の代わりに、当然のように彼らは自分の銀行口座の番号を書いたメモを渡してきた。キャンプの入り口で子供たちの歓声と“フアック”で難民可哀そう的マインドはとっくに粉碎されている、難民？この子供たちは一体何なのか、日本にはいない、ゲームもやってない、だけど眼だけはぎらぎら（or, キラキラ・・・）と燃えている、生き残るといふ一点においてここもまたガチンコの世界だ、市場も以前より活気があった、

とくに生活が向上したのか!？（難民生活の向上って一体何なのか）、コンゴから持ち込まれた大量の布地が市場の軒を飾っていた、キャンプにもマーケット経済（ビジネス）が持ち込まれていることだ、キユリオ・シヨップ（土産物屋）ができていたのには驚かされた、学生たちは難民キャンプでしばしシヨッピングを楽しんでいた、それでお金が落ちればそれはそれで悪くはない。

確かにキジバはできてからすでに16年を経過している（1996年コンゴ戦争を逃れてきた在コンゴルワンダ人、バニヤムレンゲ Banyamurenge たちが暮らしている、コンゴ紛争が解決されない限り彼らの本当の明日はない、ルワンダ政府も海外からの投資を呼び込むにあたって、いまだに難民がいるということに危機感を感じている）、難民キャンプであると同時に機能的には一つの村に近いかもしれない、しかし彼らは難民として孤立し、周囲のルワンダ人社会に普通に溶け込むわけには行かない、その事實は厳然として残る。

最後にちよつとだけ映像ジャーナリスト魂をくすぐる出来事が待っていた、キジバに来る前甲斐先生と話して、日本から持ってきた古着や文房具類が少し少ないのではということになり、朝、途中のスーパーでゴムボールやチョコレート類などを買い足した、

帰り際立ち寄った土産物屋を出たとき、セキユリテイの男が先ほど渡したチョコレートの入った箱を持ち出し、配り始めた、我々を見ていた大勢の子供たちが金網越しに何か喚きながら一斉に手を伸ばした、我先にと争って手を伸ばすその光景は、“イメー

ジ”通りの難民キャンプの子供たちだった、悲劇的景色だった、これでもかど手は金網の穴から、柵の上から伸びてくる、広げられた小さな手は懸命にチョコレートに届こうとしている、どれほどかれらはチョコレート甘さを知っているのか・・・、10年から15年も生きていれば一度くらいは食べているに違いない、普段全く忘れていたその強烈な記憶を喚起し、そこに向けて子供たちは悲鳴を上げていく、絶叫している、泣いている・・・、ボクもまた頭の中でかつての難民キャンプ取材の記憶を連写しながら黙ってカメラを回し続けた、ふと見ると近くではそれとは関係なく学生が遠くの風景を撮っていた

●キガリのホテルで行った中間発表

〈15人の思い〉

いろいろと今現在使える頭を回転させながら手探りで、きわめて肯定的にこのアフリカ・ルワンダ・スタツアについて書いてきた、〈15人の思い／中間発表〉を書く前にどうしてもボクが直面せざるを得ない思いについて書いておく

●真に世界で生きてゆこうとする覚悟の無いこの国、結局オレタチは独りで生きていくと錯覚し続けているこの国、グローバリゼーション、国際化という言葉が叫ばれ、氾濫すればするほど、それは虚しい遠吠えに聞こえ、裸の王様的に見えてならないこの島国にとって“世界”とは何なのか、人は自分が豊かで安寧で居れば居れるほど、誰とも関わらないで一人生きていくに違いない、そういう生き物だ、もしそうならいったい世界ってなんなのか、他者ってなんなのか、何のために助けるのか、ただ自分の平穏を守るためだけに生きてゆ

けばそれでいいのか、もちろん甘い感傷（センチメンタリズム）は捨てたい、捨てたところで今一度リアルな世界を振り返って見なければならぬ、とくに島国に生きる人間にとって

もしかしたら、おおつさん、それは老人の世迷言といわれるかもしれない、でもボクは世界を見てしまった、みんなも見てしまったと思う、今生きているこの国とはかなり違う、時には戦乱に明け暮れ、また時には殺し合わなければならなかった世界と国をはっきりと自分の意志、しかも少なくとも金を払ってまで見てしまったのだ、しかもそこに今のこの国にはない何か、ストリートでパワフルで、それでもがき苦しんでいる●●何を前に、感じ、また学びに来たのか、そこで感じ人間として学んだことを

そこから今一度この国について、その未来について考えてもらいたい、それがこの小さなアフリカ・スタツアのチャレンジだからだ

●最後に世界を見てしまったみんなの印象に残ったコメントを書いておく
参加した学生にとってこの旅は研究の旅ではない、感じる旅であり、想像する旅だ、予想以上にみんなは感じていた、感性のレベルは高かった

他の外国人滞在客たちがディナーを楽しんでいる中ボクラ16人はやや端の方に席を取り、いつものように先生の進行が始まった、一人5分から10分、いろんな感じ方があったが印象に残った言葉、見方などいくつか挙げてみる

普通にあつたのが虐殺教会の骸骨を見ても実感が無い、ムランビのミイラを見てやつ

と少し「虐殺」を感じられたが・・・、死を目の当たりに感じたのは帰り道に出会った交通事故の死者、格差を実感した人も多かった、難民キャンプの中でさえも格差が生まれておることに驚いた、アフリカを伝えない日本のメディア、ルワンダの過去の虐殺、戦いを知れば知るほど、沖縄、領土問題など今の日本社会の問題を意識せざるを得ない、しかもそうした問題が本当に考えられていない（思考停止した日本社会）ことも見えてきた、明日以降の自分の行動について考えてみる、研究者としてとくに長期間にわたって戦略的に人の気持ちを変えてゆくプロセスの巧みさに凄さを感じた（フツ族過激派のプロパガンダティストたちは農民など多くは字も読めない人間たちを反ツチへと見事に洗脳、誘導していった）、さらにキャンプにはさまざまな形の支援が集まるがそうした場所と、周囲の普通の村との格差も問題になってくる、生で感じられることの凄さ、自分はまだまだ見る目が甘かった、あつてはならないことだ、ミイラを見たときは言葉にならなかった、街、ルワンダ・タワー・・・、人も国も発展しないわけにはいかない、発展と虐殺は関係ない、難民キャンプの人たちは彼らなりに日々の暮らしを楽しんでいた、どんな状況でも人生を楽しむのはいいことだ、子供たちの笑顔が忘れられない、キブエ（地方の町）からキガリリに向かう時、街並みも服装もどんどん変わってゆく、良くなつていくのがわかった、ここに来て初めて日本という国を見た、それは「平和ならいいだけではない」ということ、もっと、みんな自分が意見を持ちはっきりと意思表示をしてこの国の舵を取っていくべきではないか、も

ともと自分は「平和主義」者だったが、でもここ（ルワンダ）に来て人が自分のエゴや利益で実際に殺し合った事実を目の前にして自分は甘かったのではないと思うようになった、もっと知りたい、もっと知りたくなつた、アフリカの匂い、ホコリ、みんな好きです、ムランビの虐殺現場からつい最近できたばかりの難民キャンプ（KIGEME / 以前ブルンディ難民が使用していたが彼らが帰った後、今戦乱に揺れているコンゴからの難民たちが收容された）に急に行くことになり、途中、コーヒーの木が栽培されているのが見えた、「虐殺現場」「難民キャンプ」「コンゴ」（キガリ・タワーからわずか3時間弱走ったところにくうした非日常のしかもリアルな世界が広がっている、そこにボク／大津は世界の奥深さ、リアリズムを感じている、ついだが、この地域の国や人たちは尖閣20個分くらいの緊急の課題に直面し、よくも悪くも日々その現実的問題／民族、国境、文化、土地、言葉、資源等々／解決に取り組んでいるんだよとも言った）、その並びの中にコーヒーの木が栽培されている、たまたま自分はスタバでバイトをしているが、自分の店ではルワンダコーヒーは扱ってないが他店では扱っている、あのコーヒーがこんな状況（の国）から来ているのを目の当たりにして、なんかすごい感情に襲われている、また人間は殺しを見るより、何か楽しいことをしたい、ムランビに来ていたフランス軍（準PKO部隊／トルコ石作戦）が虐殺のさなかでも小高い丘の上でバレーボールを楽しんでいた気持ちも分からなくもない、そこがそれにふさわしい、きれいな場所だからだ、骸骨を見ても、ミイ

ラを見ても現実を受け入れられない自分、やっぱり他人事だと感じてしまう自分はおかしいのか、麻痺しているのか、逆に難民キャンプでは少しリアルに感じることでできた（途中、何故か鼻血を出した、鼻に紙を突っ込んでトーク）、それら以上に恐ろしさを感じたのは、洗脳、プロパガンダの巧みさ、すごさだ、もし自分が先生（甲斐先生）や大津さんに中国人は悪いと教えられ、殺せと言いつづけられたら、気持ちが悪くかもしれない、ルワンダ人は動かされたのだ、そうしたことはいつ起きてもおかしくない、貧富の差を感じたが、罪の意識はないし自分の生活スタイルを変えるつもりはない、自分は麻痺しているのか・・・、自分は人間が好きです、アフリカにもいつか行きたいと思ってました、いろんな人、街、虐殺の話・・・、もつと見たいアフリカ！友達にルワンダの話をしたい、今まだ正直整理がついてない、ミイラ、姿、臭い、受け止められないし震えも来る、人はなんておろかなんだらう、いつ変わるか、何をするかわからない、日本はリベリズムかもしれないがアフリカはリアリズムの世界だ、ここではやっぱり住めないし、受け入れられないことを受け入れるのは難しいことを実感している、でもルワンダの町や施設を見ると今ルワンダは発展しようとしている、成長も速い、日本もルワンダに見習わなければならぬ！難民キャンプ（KIZIBYA）の子供たちは確かに元気が良かったかもしれない、でも彼らはコンゴから逃げてきた人たちだ、彼らは一体戦争をどう思っているのか、食料不足・・・、でも市場やビジネスもあるし、教えられてきたことは違う

最後に先生がこれまではおもに過去のルワンダを見てきたが（難民キャンプは現在ですが）これからは現在と未来（JICAのプロジェクトやシティツアー、学校等）について見て、考えて行くつもりです、と言ってしめた、その後、ボクに振られたので、みんなの感性のレベルは想像以上に高かったということ、研究も勉強もみなその「感じた」「何かから始まる、だから刷り込み（事前情報、勉強）抜きでそこで何を感じたか」が最も大切になるみたいなのを言った（最後に究極のコメント（個人的にいいなと感じた）を書かせてもらう

「タラマ教会の中に入ろうとしたとき悲鳴が聞こえた、ニヤマタ教会ではそつとしておいてくれないか、というささやきが聞こえた、これは決して過去の話ではない・・・、虐殺記念館を出ると目の前に「キガリ・タワー」が建っていた、それは埋められない過去を必死に埋めようとしているように思えた、自分にできることって何だらう、まだ気持ちの整理がつかない」

このライブ感、問題の把握度、短いフレーズの中に今、過去の苦しみと困難を乗り越え未来に向かおうとしているルワンダの問題と挑戦のすべてが放り込まれているように思えた

世界／アフリカに学び、日本を変えてゆく、ガチンコ・アフリカ・スタツアはこれからも続く・・・